

<目的>国民栄養調査で唯一所要量を満たしていないCaの摂取量を向上することは、高齢化社会を迎え骨粗鬆症の問題がクローズアップされている今、急務であるが、Caに関する意識や知識面での調査はほとんどなされていない。そこで中高年婦人を対象に、骨密度測定とともに食生活状況、意識等に関する調査を行い、骨密度に影響を及ぼす因子やCa摂取との関連性について検討を行った。

<方法>兵庫県予防医学協会・コープ神戸のご協力を得て、1992年9月から3月に、兵庫県神戸市近辺在住の健常な生協組合員1,650人を対象に、大腿骨頸部の骨密度測定（DEXA法、DPX、Runar社）とともにCa摂取を含む食生活状況および意識や知識等を問うアンケート調査を行った。閉経を期に骨密度の減少が著しいため、対象者を閉経前後の3群に分け、分散分析、Scheffeの多重比較、t検定およびカイ2乗検定を行い検討した。

<結果>摂取頻度から求めたCa摂取量は、平均では所要量を満たしていたが、閉経前群で有意に低く、また、牛乳の占める割合が全体に高いことが特徴的であった。横断的な判断では、3群共に現在のCa摂取量と骨密度には直接相関は見られなかったが、過去の牛乳摂取は運動との併用で効果があると推察された。また、閉経以降の2群では知識点が高いほうがCa摂取量が高い傾向にあるものの、閉経前群では認められず、骨粗鬆症に対する意識や日常生活における意識も閉経以降群に比べ低い傾向にあることから、閉経期以前食生活状況の改善が望まれる。